

特集

子どもと動き

たかが子どもの動き、されど子どもの動き

宮丸凱史

子どもの動きの習得の発達の意味

ヒトはおしなべて動きが未熟・無能力な状態（生理的早産）で誕生する。そして、まず二歳ころまでに人間らしくなるための動き（直立二足歩行／走行／把握／操作）を習得する。その後、三〜六歳（幼児期）には、その後の長い人生でたくましく、豊かに生きるために不可欠な「基本的な動き」（Fundamental Movement Patterns）を習得しなければならない。

子どもも大人も運動の必要性は何ら変わらない。

しかし、子どもにとって「動きの習得」が必要不可欠である決定的な二つの根拠がある。第一には、生涯にわたって必要な「基本的な動き」を、この時期に習得しなければならないこと。この時期を逃すと「習得に困難が伴うこと」、また、環境条件や動きの種類によっては「やり直しがきかないこと」（動き習得のCritical Period：敏感期）である。第二は、この時期の「動きの習得のレベル（質的・量的水準の違い）」が子どもの「情意領域」、「認知領域」の発達に重要な影響をもたらすことである。年齢相応の

動きができない、いわゆる「運動不器用」な子どもには発達の面でさまざまな影響がみられることがよく知られている。

子ども（幼児）が習得しなければならない

「基本的な動き」

幼児期に習得しなければならない動きは、生涯にわたる運動全般を見渡して、その基本となる動きである。有用性や課題性（ヒトは何のために動くのか）の視点から基本的な動きは次の四つのカテゴリーで把握される（マイネル運動学）。

- ① 日常的な生活で使う動き（日常動作）
 - ② 作業や労働のために必要な動き（労働運動）
 - ③ 表現や意志伝達のための動き（表現運動）
 - ④ 体育、スポーツとしての動き（スポーツ運動）
- 従って、幼児期に習熟してほしい動きは多種多様であり、体育科学センター^{注1}（一九八〇）は「基本的

な動き」を八十四種あげると共に、幼児期の動きの習得で大切なことは「できるだけ幅広く動きを身に付けることであり、動きの習得に偏りがあったり、全く未経験な動きが多くなる弊害を避けるべきだ」としている。多くの動きの習得によって子どもは自由環境を探索できるようになり、行動力の基盤をつくる。このことは、子どもの動きの習得にかかわる者が忘れてはならない鉄則である。こうした観点から、この時期に習得させたい基本的な動きは以下のようなⅡ類型とⅢ系統でとらえられる。

類型Ⅰ…自己の身体 の操作型

- 1 非移動系（平衡系）の動き… たつ、かがむ、ねころぶ、ころがる、さかだちする、わたる、のりまわすなど、姿勢変化や平衡維持の動き
- 2 移動系の動き… あるく、はしる、とぶ、にげる、かわす、のぼる、とびあがる、スキップ、ホップなど上下・水平方向の移動や回転移動の動き

類型Ⅱ…他者の操作型

3 操作系の動き…かつぐ、はこぶ、ささえる、つかむ、うけとめる、わたす、たたく、うつ、なげる、ける、たおすなど、自分以外の他者を扱う動き
こうした動きの発達過程は①量的発達過程と②質的発達過程としてみることができ。

①量的発達過程とは、加齢につれて各系列にわたって多くの動きができるようになる『動きの多様化』を意味する。初期には限られた動きしかできないが、成熟・経験につれてある一定の順序性をもちながら多くの動きが習得される。

②質的発達過程とは、それぞれの動きが年少期における「未熟さ」が消え、動きが合目的、経済的な動きへと質的に変容すること、すなわち、『動きの洗練化』を意味している。簡潔にいえば、「加齢に伴って可能な動きが増え、そのやり方がうまくなる」ことである。一般的には、二〜三歳

ころの動きは制限されていて「ぎこちない」が、身体の成熟や運動経験につれて、動きは急速に巧みになり、六〜七歳ころにはほぼ成人に近い協応型に達するとみられている。

子どもの「動きの不器用」がもたらす

心理的損傷

子どもの動きの発達のな意味を知るには、典型例として「子どもの動きの不器用」について理解しておく^注とよい。Heilock (一九七八) は、子ども(年少期)が年齢水準を下回って動きが未熟で、ぎこちないケースを「動きの不器用」(Awkwardness)としてとらえている。「不器用」が生じる一般的な原因として以下のことを列挙している。

- ①頭でつかち…頭部の成長が大きくアンバランス
- ②相対的に手が小さい
- ③肥満傾向

④ 知能レベル

⑤ 情緒的混乱・不安定

⑥ 意欲の欠如

⑦ 練習機会の欠如

⑧ 早期からの練習

⑨ 習得方法が貧弱など

これらのことは、形態の発育、認知発達、情緒の安定性、動きの習得機会の欠如、習得の適時性などの要因が「動きの不器用な子ども」を生じさせることを示唆している。

また、「動きの不器用な子ども」にもたらされる心理的損傷について、以下の七つの精神発達の特徴を指摘している。

① 劣等感

② ほかの子どもへのねたみ

③ 大人への恨み

④ 社会的排斥

⑤ 依存性

⑥ 身体的臆病

⑦ 退屈と厄介な行動の出現

これらの指摘は、子どもの時期においては「特別にうまくなくてもよいが、年齢相応に動けること」が精神発達に重要な意味をもつことを理解させてくれる。「子育て」や「保育現場」では、とかく軽視されがちな子どもの「動きの習得」について、改めて提言をしておきたい。「たかが子どもの動き、されど看過できない子どもの動き」なのである。「動きの不器用」は、「仲間との遊びへの参加を制限する」、そのことは「仲間との遊びの中で学ぶことを欠如させる」、その結果が「情意や認知の発達に影響する」という図式を描いておく必要がある。

子どもの動きの獲得のための三つの可能性

子どもはどのようにして新しい動きを獲得するの

だろうか。朝岡^{朝岡}(一九八九)は、①「自発的分化」

②「模倣による獲得」③「表象に基づく獲得」の三つの可能性をあげている。

①「自発的分化」とは、子どもが環境の条件や変化に適応しながら、既得の動き(歩行)を反復しているうちに「動き方」に変化(たとえば、支持のない局面の出現)が生じ、偶然に新しい動き(跳ぶ、走るなど)が発生する可能性である。従って、この可能性を増やすためには、変化に富んだ遊び環境に恵まれるか、そうした環境を訪ねる機会を多くすることが必要になる。

②「模倣による獲得」は、子どもの典型的な習得方式であり、身近にいる人の動きを自分のものにしてようと「まねる」ことによる習得である。言うまでもないが、子どもにとって目前にある「まねたいと思うモデルの存在」が不可欠で、即時模倣のパターンとなる。子どもにとっては、魅力的で多

少手応えがあり、挑戦意欲をかき立てられる、いわゆる、かっこいいモデルが目の前にあることが重要であり、親、遊び仲間、保育者が最も身近なモデルになり得る環境があってほしい。

③「表象に基づく獲得」は、表象、またはイメージに基づく習得である。これまでに印象に残っている目標イメージや動きの表象を再現しようとして生じる遅延模倣のパターンをとる。たとえば、楽しくて忘れられない物語の主人公の動きを模倣したり、お母さんになりきって動きを再現したりすることなどがあげられる。これらのいずれの習得方法であっても、子どもが新しい動きを獲得するには、豊かな家族的・文化的・教育的・社会的環境に恵まれて成育することが必要であり、子どもが潜在的に備えている習得の可能性が触発されるように支援しなければならない。塾には通わせるが、子どもと運動をして遊ばない家庭や、保育の

中に自由な運動遊びのプログラムが乏しい保育施設には「動きの不器用」がより多く生じることが懸念される。

動きが不器用なまま就学すると、

動きの習熟の壁にぶつかると、

小学校の低学年期になると、幼児期よりも難しい運動をする機会が増える。それは、①基本的な動きをいくつも連続的または同時に組み合わせたり、②多くの情報や変量(ルールや戦術や仲間の数など)を状況に即して判断したりして動かなければならない運動遊び(ドッジボール、キックベース、どろけいなど)であり、高学年に始まるスポーツ技能の習得への「移行的運動技能の段階」とされている。ところが、幼児期に動きが不器用なまま就学すると、これらの運動の成就には困難が伴い、習熟の障壁(Proficiency Barrier)に出会うと共に、仲間との遊

びやゲームから外されることになるかもしれない。また、そのことを契機にして「運動嫌い」や「体育嫌い」が生じ、さらには「いじめ」の対象になることも懸念される。

以上のことから、改めて幼児期に「多様な基本的な動き」を習得しておくことがいかに大切かが認識されよう。「たかが子どもの動き、されど子どもの動き」である。

(十文字学園女子大学学長)

参考文献

- 1 体育科学センター調整力専門委員会…幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究Ⅰ、体育科学8 一五〇～一五五頁 一九八〇年
- 2 Hurlock E. B. Child Development. McGraw-Hill 一五四～一五五頁 一九七八年
- 3 朝岡正雄…スポーツ運動の学習位相に関するモルフォロジー的考察 筑波大学体育科学系紀要12 六五～七二頁 一九八九年